325/. Сонымен қазіргі түркі тілдерінде қолданылатын мүмкін (мөмкин, мүмкүн, мүмкин) модаль сөзінің формасынан тарихи тұрғыдан күк формасынның бөлшегін байқауға болады. Тофалар тілінде мүмкін модаль сөзінің мағынасында «чоъhом» тұлғасы болады. Оны монғол тілдеріндегі «чухам, сохом, чукум» тұлғаларымен байланыстырады. Мысалы: ам ур болбас мен, чжоъhом – я, наверное, долго не проживу! Иресаң дейдірі: «Сиинҥ гүчжүҥ чжок, ачжыры чараш сен, бүннү бәәр сен, чжоъhм – Медведь говорит (мыши): «У тебя сил нет, ты слишком маленькая, наверное, утонешь /19, 268/. Ал орта ғасыр жазбалар тілінде мүмкін тұлғалы модаль сөз ұшыраспады. Оның мағынасында "бозғай, мағар, түвүн" тұлғалары қолданылған, бірақ оның өзі сирек кездеседі.

Жалпы қорыта айтқанда модаль сөздердің ұғымы, категориясы, құрамы мен семантикасы, құрылымы және қалыптасуы жайлы түркітануда біршама зерттелінгенмен, жекелеген түркі тілдерінде модаль сөздердің құрамы да, білдіретін модальдық мағыналарының классификациясы да әртүрлі. Яғни, модаль сөздер модальдық семантикасына қарай қазақ тілінде 8-ге, қырғыз тілінде 2-ге, түрік тілінде 3-ке, якут тілінде 24-ке т.б. топталып қарастырылса, құрамдық көрсеткіштері де 20 мен 50-дің арасын қамтып, бірліктері әртүрлі болып келеді. Сол сияқты түркі тілдерінде модаль сөздердің сөз табылық дәрежесі де толықтай шешілген емес. Яғни, зат есім, сын есім, сан есім т.б. тәрізді емес. Тіпті бір тілдің өзінде екі көзқараста қалыптасқан болып отыр. Ал оның көне түркі және орта ғасыр жазба мұраларында немесе жеке бір топтарында қолданылуы жағынан салыстырмалы түрде зерттеулер ғылым тезіне түсе қойған жоқ. Осы мақсатта қазіргі қазақ тіліндегі модаль сөздердің тілдегі алғашқы көріністері, архетиптері, тіркесті түрлері т.б. тілдік жалпы сипаты қарастырылу үстінде.

***

1. Вендина Т.И. Введение в языкознание. - М.: ."Высшая школа", 2001. -288с.
2. Гируцкий А.А. Введение в языкознание. Учеб. пособие, 3-е изд. - Минск: ТетраСистемс, 2005. -288 с.
3. Маслов Ю.С. Введение в языкознание. Учебник 5-ое изд. - М.: Изд-во "Академия", 2006. -304 с.
4. Реформатский А.А. Введение в языкознания. 5-ое изд. Учебник для вузов. М.: Аспект Пресс, 2007. -536 с.
5. Қазақ грамматикасы. Фонетика, сөзжасам, морфология, синтаксис. - Астана, 2002. -784 б.
6. Құлманов С. Қазақ тіліндегі мүмкіндік модалдігінің функционалды-семантикалық өрісі. Филол. ғыл. канд. дис. авторефераты. - Алматы, 2004. -33 б.
7. Грамматика современного якутского литературного языка. - М.: Изд-во Наука, 1982. -496 с.
8. Салқынбай А. Қазіргі қазақ тілі. Оқу құралы. - Алматы: Қазақ университеті, 2008. -340 б.
9. Мамадилов Қ. Қазіргі қазақ тіліндегі етістіктің модальдық құрылымдары. Филол. ғыл. кан. дис. авторефераты. - Алматы, 1996. 26 б.
10. Кыргыз адабий тилинин грамматикасы. Фонетика жана морфология. I-бөлүм. - Фрунзе: Илим, 1980. -583 б.
11. Мусаев К.М. Грамматика караимского языка. Фонетика и морфология. - М.: Наука, 1964. -344 с.
12. Кононов А.Н. Грамматика современного турецкого литературного языка. Изд-во АН СССР. - М.-Л., 1956. -384 с.
13. Петров Н.Е. Модальные слова в якутском языке. - Новосибирск: Наука, 1984. -208с.
14. Кондратьев В.Г. Грамматический строй языка памятников древнетюркской письменности VIII-XI вв. – Л.: Изд-во ЛГУ, 1981.-190с.
15. Древнетюркский словарь. - Л.: Наука. АН СССР, иност. языкознания. 1969. -676 с.
16. Исаев С. Қазақ тілі жайында ойлар. - Алматы, 1997. -223 б.
17. Қаржаубай С. Орхон мұралары. 1 кітап. - Астана: Күлтегін баспасы, 2003. -392 б.
18. Айдаров Ғ. Орхон ескерткіштерінің тексі. - Алматы: Қаз ССР "Ғылым" баспасы, 1990. -220 б.
19. Дыренкова Н.П. Грамматика ойратского языка. Изд: АН СССР - М.-Л., 1940.-312 с.

***

В статье рассматриваются исследования модальных слов тюркских языков и дается пояснение об историческом составе.

***

Investigation of modal verbs of the Turkish languages is discussed in the article and explanation of historical composition is given

Y. Sadygul

オノマトペの分類について

1. はじめに

オノマトペ語彙は学者によって様々に分類され，擬声語・擬音語・擬容語などの用語が作成されている。本稿では，オノマトペとは何なのか，どのように定義され，どのように分類することがより妥当であるかについて論じる。

2. オノマトペは何を指すか

オノマトペは，通常には擬音語・擬態語を指す言葉の総称である。「オノマトペ」というカタカナ言葉（外来語）そのものはフランス語のonomatopeeに由来している。英語ではonomatopoeiaで，カタカナで「オノマトペア」「オノマトピーア」のように表記される（『日本国語大辞典第2版』より）。また，フランス語onomatopeeの語

源は旧ギリシア語ὀνοματοποιΐαにさかのぼり，造語すること，名前を作ることという意味があったとされている（『小学館ランダムハウス英和辞典』より）。

オノマトペの定義には様々なものがあるが，次の定義は『現代言語学辞典』から引いたものである。オノマトペとは「動物の鳴き声や水の流れる様子など，自然界の音を模倣したり，それを象徴的に再現すること，またそのような語を指す」ということである。

学者によってオノマトペの定義は若干異なっているが，それに共通している考え方は，オノマトペと考えられている語の形態（音，呼び方）「指すもの」と意味（イメージ，概念）「指されるもの」が何らかの形で結びついているということである。例えば，動物の鳴き声を例にすると，日本語においては「ワンワン」「ニャーニャー」「ブーブー」「ヒヒーン」という擬声語がある。これらは実際の動物の鳴き声を模倣して用いられていることに対して異論を唱える人はないであろう。このような擬声語の場合は，耳に聞こえてくる音をそのまま日本語にある音素に対応させているため，形態と意味の関係はどちらかと言えば有契的なのもののように感じられる。このような考え方は言語学の基本的な原則とされる「記号の恣意性」に反している。「音と意味の関係」について「記号学の祖」と呼ばれるソシュール（Ferdinand de Saussure）が言語記号は恣意的（arbitrary）であり，能記「指すもの」と所記「指されるもの」[1]との関係は自然的あるいは必然的なものでなく社会的な約束によって成り立っていると議論している。それは，例えば，日本語で「ホン」（本）と呼ばれている物体の場合は，そのものの呼び方「指すもの」とそのものの概念「指されるもの」との間に必然的な関係が存在しないということを示している考え方である。呼び方と概念との間の関係が必然的なものではない故に，本という物は英語では‘book’，ロシア語では‘книга’/kni:ga/，カザフ語では‘кітап’/kitap/などの各言語それぞれに異なる呼び方になっていることは承知の通りである。しかしながら，一般語彙と異なってオノマトペの場合は，呼び方と概念が何らかの形で相関しているため，言語の違いを超えた，様々な言語において普遍的に存在する例が観察される。例えば，銃弾が発射される音を日本語では「バン／パン」，英語では‘bang’，ドイツ語では‘peng’，フランス語では‘pan’，スペイン語では‘pum’，バスク語では‘dzast’という擬音語で表す（上記の例は吉村（2004）からの引用）。これらの語の多くは，両唇閉鎖音（p，b）と鼻音（n，ng）を用いている。若干異なっているが，言語を超えた普遍性が見られる。

このように，一般語彙と異なってオノマトペは，形態と意味の間には関連性が観察されるものであり，「記号の恣意性」に反する例外的な存在であると言えよう。しかしながら，オノマトペは「記号の恣意性」に反するという考え方に対しては，一般語彙と異なってオノマトペが元々「音」であるものを言語音で表し，通常の意味を表すのではないため，音と意味の間に恣意性があるということの反証としてオノマトペを持ち出すことが，そもそも適切ではないという人も少なくない。

3. オノマトペの名称と定義

オノマトペは，この分野を研究している研究者によって様々に定義されており，その名称の取り扱いに関しては，現在のところはまだ統一化はされていないようである。例えば，「オノマトペ」を‘onomatopoeic words’と呼ぶ研究者 Brocholos 1990； Reinelt 1990； Ohala, Hinton, Nichols 1990； Murata 1990 など） がいれば，‘imitative words’と呼ぶ研究者 Herlofsky 1990；Oswalt 1994） もいる。 また， Hamano（1998），Tsujima（2001）がこの語彙群を‘mimetic words’， Kakehi, Tamori, Schourup（1996）が iconic words’と呼んでいる。

日本語オノマトペを研究している学者においては，音や声を表す語を擬音語・擬声語，ある物などの様子や状態を表す語を擬態語にし，全体を「擬音語・擬態語」と総称する研究者が多い（天沼1974；宮地1978；阿刀田・星野1995；苧阪2001；飛田・浅田2002）。また，表す意味によって「擬音語・擬態語」に分け，全体を「オノマトペ」と呼ぶ学者（日向1998；田守・スコウラップ1999；小野2007；角岡2007）がいるし，擬音語の部分を擬声語にし，「擬声語・擬態語」に分ける学者もいる（石黒1993；スコウラップ1993。Chang（2000）がこの語彙群を意味によって「擬情語」擬態語／擬容語」「擬声語」「擬音語」に分け，全体を「オノマトペ」と総称している。

このように，「擬音語」「擬態語」などを「オノマトペ」で総称する，日本語オノマトペを研究している学者が少なくない。しかし，西洋諸国からすると，「オノマトペ」という語は伝統的には「擬声語・擬音語」（ある声や音を表す語）を指している。西洋諸言語には「擬態語・擬情語」（ある物の状態・様子，人間の心の状態を表す語）とされる音象徴語は少ないことから，音象徴語全体「擬態語・擬情語」を含めて「オノマトペ」とするには違和感があるという人がいるかもしれない.

本稿では，音象徴の語彙群を「擬声語」擬音語」「擬態語」「擬情語」に分類し，全体をまとめる言葉として「オノマトペ」と呼ぶことにする。これらをオノマトペ専門辞書の範囲にしぼって以下のように定義付ける。

・「オノマトペ」又は「オノマトペ語彙」とも呼び，形態と意味の間に直接的

[1] あるいはもとのフランス語をカタカナで表記して能記は「シニフィアン」（signifiant），所記は「シニフィエ」（signifie）と呼ばれる。

・間接的な関連性を前提とした語彙群のことである。以下の下位類を含んだ語である。
・擬声語」動物の鳴き声と人間の声を模倣した語のことである。
・擬音語」自然界の音を模倣した語のことである.
・擬態語」音のない自然界の物や人間と動物の動作や様子
状態などを音に表した語のことである。
・擬情語」音のない人間の心の状態と感覚を音に表した語のことである。
オノマトペを以上の下位類に分類した理由を次節で詳しく説明する。

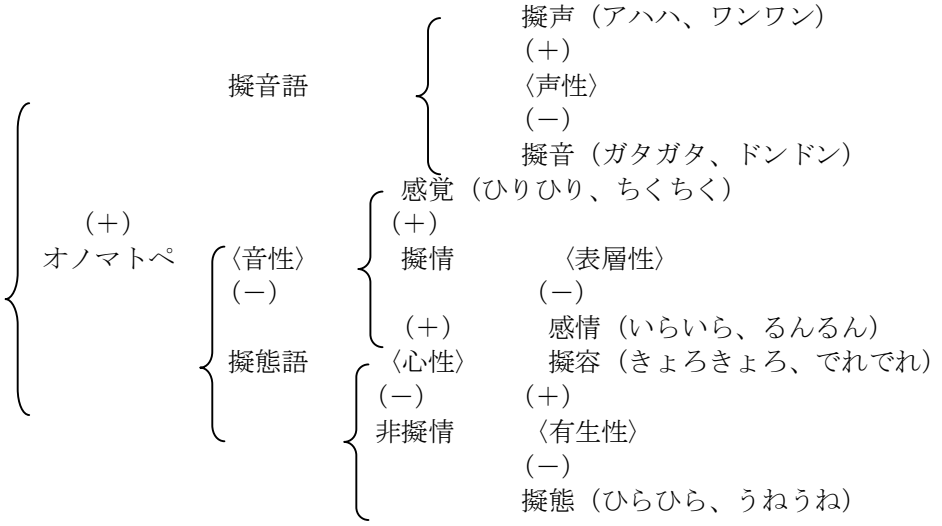
4. オノマトペの分類

日本語オノマトペにおいては，特に英語などの西洋諸言語と比べると，擬音語の多さが指摘されることながら，並びに擬態語も非常に多数存在するということも注目される。前節で見たように，日本語オノマトペを研究する学者の大半がオノマトペを大きく「擬音語（擬声語）・擬態語」のように2つの区分に分類している。さらに，日本語オノマトペのもう一つの特徴としては，人間の心の状態や感覚を描写する擬情語がしばしば指摘されている。オノマトペの中から感情を表す語彙群を区分して「擬情語」と初めて名づけたのは金田一（1978）であろう。金田一による分類を以下のように示すことができる。

（1）金田一（1978）によるオノマトペの分類
・ 擬音語は世界の音を写した言葉 擬音語
無生物の音を表すもの 声語 生物の声を表すもの
・ 擬態語は音を立てないものを，音によって象徴的に表す言葉 擬態語 無生物の状態を表すもの
・ 擬容語は生物の状態（動作様態）を表すもの
擬情語 人間の心の状態を表すもの

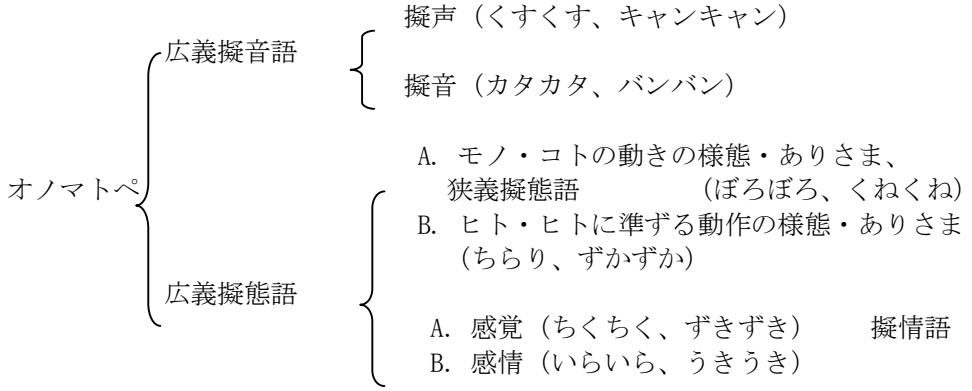
次に，田守（1993）による分類を紹介する。田守（1993）は，オノマトペを図1のように分類している。図1から窺えるように，田守（1993）はオノマトペを擬態語／擬音語に分け，さらに擬態語を擬情／非擬情に分けている。そこから，擬態／擬容，擬情／感覚，擬音／擬声を取り出して同じレベルにおいている。

図1 田守（1993）によるオノマトペの分類



次に伊藤（2002）による分類が挙げられる。伊藤（2002）による分類は，図2の通りである。

図2 伊藤（2002）によるオノマトペの分類

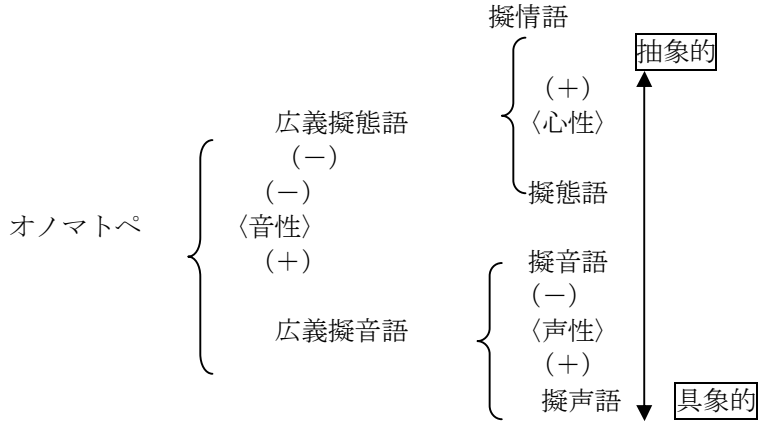


伊藤（2002）は，擬態語の下位類を狭義擬態語と擬情語とに分けている。狭義擬態語と擬情語は，更にそれぞれの下位類としてA，Bに分類されている。伊藤（2002）は，田守（1993）と同様に「擬情語」に対し

て「非擬情語」という呼び名を避けており，その理由を「呼び名によって誤った有標，無標の解釈がなされることを避けるため」と説明している。更に，「狭義擬態語」という用語を用いた理由として「「擬情語」にあてはまる語彙は，残りの擬態語よりもより限定されており，特殊な性格を持っている。そのため，擬態語の中で擬情語を捉えるという全体的な立場から，擬情語とみなさない擬態語はそのまま狭義擬態語と呼ぶ」と主張している。

本稿では，オノマトペの分類を設定する際，田守（1993）と伊藤（2002）を参考にし，その分類を以下の図3のようにする。

図3　本稿のオノマトペの分類



まず広義レベルの「広義擬音語」と「広義擬態語」を設定し，さらにそれぞれを狭義レベルの「擬声語」／「擬音語」と「擬態語」／「擬情語」に分類した。最初，広義レベルについて検討しよう。

5.　広義・狭義レベルの分類

上述したように，擬声語・擬音語は音であるものを言語音で表そうとしているものであるのに対し，擬態語・擬情語は音のない様子や状態を言語音で表そうとしているものである。両者を分けるとならば，〈音性的〉つまり，音を表すか否かという弁別特徴で分類するのが妥当的であろう。この弁別特徴をもとに，前者は実際の声・音を音で表そうとしているため，形態（音）と意味（イマージ）の間の関連性が直接であるのに対し，後者は音のない様子・状態を音で表そうとしているため，形態と意味の関連性が間接的であると言われている（日向 1998；伊藤 2002など）。本稿では，擬声語・擬音語をまとめて「広義擬音語」，擬態語・擬情語を「広義擬態語」と呼ぶことにする。

次に，狭義レベルについて検討する。図3では，「広義擬音語」をさらに「擬声語」／「擬音語」，又は「広義擬態語」を「擬態語」／「擬情語」に分類した。前者は〈声性的〉であるかないか，後者は〈心性的〉であるかないかという弁別特徴で分類されている。最初は，「擬声語」／「擬音語」について議論する。

「擬声語」が〈声性的〉になっているのは，「擬声語」が生物，つまり，人間の声と動物の鳴き声を表すからである。多くの研究者が声・音であるものを表すオノマトペを「擬声語」と「擬音語」に分類せず，この語彙群全体を「擬音語」にしたり（天沼1974；宮地1978；阿刀田・浅野1993；苧阪2001；飛田・浅田2002），逆に「擬声語」にしたりする（石黒1993；スコウラップ1993；大坪2006[2]）。しかしながら，本稿は両者を区別すべきだという立場である。繰り返しになるが，擬声語は人間の声・動物の鳴き声を表すのに対し，擬音語は自然界の音を表す，のように両者は対象にするものが異なっている。描写される対象が異なっている故に，「擬声語」と「擬音語」の間に複数の相違点があるはずであろう。下位類のオノマトペの相違点を明らかにすることは本稿の目的の一つであるが，結論から述べると，「擬声語」と「擬音語」の間には次の相違が見られる。それは，意味上では「擬音語」より「擬声語」の方がより特定化されているということである。例えば，擬音語の「かたかた」は「硬くて軽い物が連続的に衝突する音」を表すが，具体的に何の音を表現しているのか，特定することは困難である。以下の例から分かるように，様々な物体が衝突することによって出る音を「かたかた」の形式で表現することが可能である。

a. 息子はお弁当箱を<u>かたかた</u>鳴らして帰ってきた.
b. 春一番が窓を<u>かたかた</u>といわせた。
c. 彼は一日中<u>かたかた</u>とワープロを打っている。
d.　部長はじれると万年筆で机を<u>かたかた</u>叩く。
（飛田・浅田 2002. p. 39）

この例から，「かたかた」は性質の異なる音を描写することができ，特定されていないということが分かる。また，「かたかたという音がした」のように，ある特定の文脈がないと，何の音がするかと比較的解かりにくい。このような語は1つの意味を表すと解釈されるのは一般的である。これと比べて擬声語は，例えば笑い声を表す「げらげ

[2] 大坪（2006）はオノマトペ全体を現すのに「擬声語」という名称を扱っている。

ら」を例にして見ると，大きな笑い声を表すということが，文脈がなくても理解できる。さらに，「かたかた」については硬くて軽い物が連続的に衝突する音を表すということしか言えないが，それに対して「げらげら」は意味上ではもっと豊富であると言える。それは，以下の表に示されている通り「げらげら」は声の大きさのみではなく，性別なども表せるからである。

表1 「かたかた」「げらげら」の意味上の相違

	大きさ	イメージ	性別
「かたかた」	○（小さい音）	×	×
「げらげら」	○（大きい音）	○（マイナスイメージの語）	○（通常男性）

擬声語が擬音語より意味上ではより特定化されているということは，次のことからも分かる。複数の意味を持つ多義性の場合は，擬態・擬情の意味が擬音の意味から何らかの比喩によって拡張するという立場をとることにする。例えば，「がたがた」には以下のような意味と用法がある。

【意味①】（音）：前の通りをバスやトラックが通るたびにがたがたと家なりする。

【意味②】（態）：暗闇でその気味の悪いうなり声を聞いたときにはこわくてがたがたと震えがとまらなかった。

【意味③】（態）：こんな店ぐらいちゃんとやっていけるよ。がたがた言わずに見ておれ。

【意味④】（態）：婚約者の突然の死で将来の夢も希望もがたがたと崩れてしまった。

【意味⑤】（程度）：（略）折り返し点を過ぎてから速力ががたがたと落ちた。

（阿刀田稔子・星野和子（1995）『擬音語・擬態語使い方辞典』）

この辞書記述から，「がたがた」の意味①は擬音の用法，意味②，③，④，⑤は擬態の用法であるということが分かる。意味①は「がたがた家鳴りする」のように何かが振動する音を表す。意味②は「がたがたと震えがとまらなかった」のように物理振動を直接的に表現したものである。ここでは，擬態の意味②は，擬音の意味①からある比喩に基づき拡張していると考えられる。さらに意味②から意味③が拡張するなどが推測できる。このように，擬音語の場合は，擬音の意味から擬態の意味が拡張する例が実際に多く観察されるが，擬声語の場合はこのような例が極めて少ない。つまり，笑い声を表す「ははは」「げらげら」や，動物の鳴き声を表す「わんわん」「こけこっこー」という擬声語から，何らかの比喩に基づき擬態語・擬情の意味が拡張するということがまず考えられない。

更に，様々な言語における動物の鳴き声の間には類似したものが観察されるということも，擬声語の方が意味上では極めて狭く特定化されているということで説明されるであろう。例えば，鶏の鳴き声は英語ではcocka-doodle-do，フランス語ではcoquelico，ドイツ語ではkikeriki，ロシア語ではkukareku，朝鮮語ではコッキョウー，日本ではコケコッコーという。

次に，「擬態語」／「擬情語」について検討する。図3では，「擬態語」と「擬情語」は〈心性的〉であるかないかで異なっている。「擬情語」は人間の内面心理を表すものであり，「擬態語」はそれと異なって人間や物体の外見をとらえているものである。

図1から窺えるように，田守（1993）が擬態語を擬情／非擬情に分類し，また擬情を感情／感覚，非擬情を擬態／擬容にわけている。本稿は，前者の擬情のものには感情／感覚を表すものが存在し，それらを区別すべきであると賛成している。しかし，後者の非擬情の場合は，擬態／擬容に分類する妥当性は低いと思われる。田守は擬態／擬容が〈有生性〉という特徴で異なっていると示している。伊藤（2002）も同様に，モノ・コトの動作と様態か，或いはヒトに準ずる動作か，という点で狭義擬態語を分類している。擬態語においてはこのような生物と無生物を表すオノマトペがあり，形式上ではそれを2つに分類してもよいのかものしれないが，厳密に言えば，生物か無生物かという特徴で必ずしもはっきりと分けられない擬態語が多数存在するため，本稿ではこのような分類を扱わないことにする。例えば，田守（1993）が指摘した「きょろきょろ」という語はどうであろうか。「目がきょろきょろしている」の「きょろきょろ」は人の目の動きを表すことから，有生性的（擬容）であると言えるのかもしれないが，以下（4），（5）のものは必ずしも有生性的であるとはいえない。

4）a. 子供は期待できらきらする目でいっせいに私を見つめた。

b. 高原の夜空には宝石をちりばめたようにきらきら星が光っている。（阿刀田・星野1995. p.101）

5）a. お尻がぷるんぷるんと揺れた。

b.スプーンでゼリーをすくおうとしてもぷるん ぷるん-逃げてなかなかすくえない。（阿刀田・星野1995. p.463）

（4）（5）では，（a）のものは人間に対して用いられているが，（b）のものは無性物に対して用いられている。このような人の様子・状態や人体のある部分の動きなどを表せる語が実に多く存在する。これらを全て生物か無性物かに分けることは無理がある。擬態語の生物と無生物のような

分類には，もう一つの問題がある。それは，動物の動作を表すオノマトペをどのように分類するべきかということである。田守（1993）は，擬容という用語を用い，それが生物の動作などを表したものであると述べているが，伊藤（2002）は，はっきりと「モノ・コト」と「ヒト」のように2つに分け，動物に関するオノマトペについては何も述べていない。擬態語は生物であれ，無生物であれ，視覚を通してある対象の動きや状態を表しているものである。そのため，形式上では生物・無生物に分けてもよいが，両者の間にはっきりとした境界線は存在せず，形態・統語的な面から見ても根本的な相違点がないように思われる。

狭義レベルではオノマトペを「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」という順番で並べた。このような並べ方は，擬声語がもっとも具象的なものであるのに対し，逆に「擬情語」はもっとも抽象的なものであるということを意味している。

6. おわりに

以上では，オノマトペの分類について論じた。本稿ではオノマトペを広義レベルと狭義レベルにわけ，「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」それぞれが異なる性質のものであるため4つに分類し，同じ狭義レベルにおいた。このような分類はより妥当であるということが、オノマトペを形態的・意味的・統語的な側面からも見て分かろう.

***

1. 阿刀田稔子・星野和子（1995）擬音語擬態語使い方辞典』創拓社
2. 浅野 鶴子（1978）『擬音語・擬態語辞典』東京：角川書店
3. 泉邦寿（1976）「擬声語・擬態語の特質」『日本語の語彙と表現』pp. 104-151大修館書店
4. 伊藤理英（2003）「オノマトペに関する考察－擬音語と擬態語間の共感覚的比喩表現について」日本語学論説資料40』第3分冊 pp. 365-370、 論説資料保存会
5. 角岡賢一（2003）「日本語オノマトペ語基の多義性について」『日本語学論説資料40』第3分冊 pp. 539-550、論説資料保存会
6. 角岡賢一（2007）『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版
7. 田守育啓、ローレンス・スコウラップ（1999）『オノマトペ：形態と意味』くろしお出版
8. 飛田良文・浅田秀子（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
9. 山口仲美（2003）『暮らしのことば擬音・擬態語辞典』講談社
10. Kakehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, and Lawrence Schourup (eds.). (1996) Dictionary of Iconic Expressions in Japanese (Trends in Linguistics. Documentation 12).- Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

***

Бұл мақала жапон тіліндегі еліктеуіш сөздердің классификациясы мәселесіне арналған. Мақалада жапон және батыс-еуропалық тілдеріндегі еліктеуіш сөздердің арасындағы айырмашылықтары атап көрсетілген. Автор жапон тілін мысалға келтіре отырып, еліктеуіш сөздерді екі деңгейге бөледі, соның ішінде *«giseigo»*, *«giongo», «gitaigo»* және *«gijogo»* деген топтарды белгілейді.

***

Данная статья посвящена проблеме классификации ономатопных слов в японском языке. В статье описываются различия между ономатопией в японском и заподно-европейских языках. На примере японского языка автор классифицирует ономатопные слова на два уровня, где делит ономатопные слова на *«giseigo», «giongo», «gitaigo» и «gijogo».*

***

The purpose of this article is devoted to the problem of classification of onomatopoeic words in Japanese language. The differences between onomatopoeia in the Japanese language and onomatopoeia in the European languages also described. The author, on the example of Japanese language classified onomatopoeic words into two levels, and divided them in «giseigo», «giongo», «gitaigo» and «gijogo».

Э. Сейдахмет

ЖАҢА ҚЫТАЙ ӘДЕБИЕТІНІҢ ҮЗДІК ЖАЗУШЫСЫ МАУ ДҮН

Мао Дүн (1896-1981), шын аты - Шэнь Дыхунь, лақабы - Шэнь Янь-бин. (Мао Дүн – жазушының қалам аты, "қайшылық" деген мағынада - ред.) Қытай қазіргі заман әдебиетінің аса көрнекті өкілдерінің бірі. Ол роман жанры саласында реалистік бағытты жалғастырып және оны онан әрі дамытты, сондай-ақ шыт жаңа әдеби үлгі жаратты. Ол өзінің жасампаздыққа толы өмірінде өте жоғары көркемдік құнға ие коптеген көркем шығармалар жазды. Ол XX ғасырдағы ықпалы ең кушті қытайдың мәдениет алыптарының бірі.

Көрнекті қоғам және мемлекет қайраткері, сөз шебері Мао Дүн (Шэнь Янь-бин)- осы кездегі қытай әдебиетінің ең үздік тумасы. Социализм құру мен бүкіл халықтық елді азат ету күресіне белсенді түрде қатыса отырып, ол қырық жылдан астам өзінің іздену жолын ең алдыңғы прогрессивтік әдебиетші ретінде өткізді. Халық оны сыйлағандықтан сенім артып мәдениет саласын басқаруды тапсырды. Мао Дүнның көптеген шығармаларының жиынтығы оның шығармашылыққа өзгермейтін қызығушылығы бар екенін дәлелдейді. Кеңес одағының оқырмандары оның шығармаларымен ширек ғасырдан астам уақыт бұрын танысты. Осы уақыт аралығында оның бірнеше әңгімелері, повестері, романдары орыс тіліне аударылды. 1956 жылы Ке-